



# 学生時代と図書館56

- 仕事場、そして道具 -



下村 喜八



半年ほど前のこと、一人の女子学生が、パン職人になりたいという将来の希望を語った。私は、自分も以前から職人にはあこがれを感じていると応え、私の知っている建具職人や洋菓子職人の話をした。するとその学生は、下村先生も職人の一人だと言った。思いもよらない言葉に驚いたが、嫌な気持ちはせず、あるいは私が四十数年やってきたことは職人の仕事だったのかもしれないと、奇妙に納得してしまった。

2年間を教養部で過ごしたあと学部生になると、いきなりゲーテやシラーの作品を読まされることになった。当時の独和辞典といえば『木村・相良独和辞典』しかなかった。よくできた中辞典であるが、ゲーテやシラーを読むには不十分で、いくら丁寧に引いていっても授業中に予習の不備を思い知らされることになる。すると、おのずとザンデルスやハイネ（両方とも編纂者の名前）という大部な独和辞典を引かなければならなくなる。それらは文学部の図書館に備えられていたが、すでに先輩や同級生が使用していると待たなければならなかった。したがって授業の準備は3、4日前から始めないと間に合わないことになる。特にハイネにはお世話になった。木村・相良でいくら苦心惨憺しても分からない箇所が、ハイネを引くと一瞬にして分かるという経験を何度重ねたかわからない。そのハイネは、今も貴重な座右の道具である。

文学部の図書館は閉架式で、文献は書庫に入って調べることになる。そして、その書庫は、何と、地下の穴倉のようなところであった。所狭しと書架が並び、書架の間に裸電球がぶら下がっている。場所によっては背表紙の文字が暗くて読めない。しかしそこは基本的な文献の宝庫であることに変わりはない。ドイツの出版物はおしなべて大部、重厚で、かつ美しい。それは活版印刷術が発明された国としての伝統なのかもしれない。書庫の中でワイマール版ゲーテ全集（143巻）やグリムドイツ語辞典（33巻）の前に立った時の感動は今も忘れることはできない。ちなみに後者は完成までに123年を要している。しかし圧巻はワイマール版ルター全集であった。グリムと同じ大版であるが、それよりはるかに厚い皮表紙の書籍が50巻ほど並んでいた。全120巻になる予定であるとのことであった。（それから四十数年後の現在、既刊は70巻となっている）。生まれて初めて目にしたこれらの書物は、私の向学心を掻き立てないではおかなかった。

当時課されるレポートは400字詰め原稿用紙20枚以上と決まっていた。そして後期のレポート締め切りは3月31日であった。時間に余裕があるのは良い反面、4、5本のレポートに意欲的に取り組むと春休みがなくなってしまうことになる。3回生の春休みのほとんどを、私は、大学付属図書館で過ごした記憶がある。

最初のドイツ留学のときに知り合ったイタリアの女学生が、後にボローニャ大学の図書館司書となった。ボローニャ大学は11世紀に創設された世界一古い大学であり、世界で初めて人体解剖がなされた大学としても有名である。上記の友人によってこの大学の図書館に案内される幸運を私は得た。しかしそれは生涯で最大のカルチャーショックとなった。中央図書館の開架式閲覧室は、四方の壁と天上に彫刻やフレスコ画が施され、まるで宮殿の巨大な大広間であった。そればかりでなく木製の重厚な書架とテーブルにも、精巧な彫刻が施されているのには驚嘆した。そして、書架には皮の背表紙の書物がびっしりと並んでいた。この閲覧室と京都大学文学部の穴倉のような書庫とを比較するのは酷であろうが、京都大学の附属図書館やケルン大学の中央図書館とも比較を絶するものがある。それが歴史の重みというものなのであろうか。

しもむら きはち（教授・ドイツ文学・思想）